

〔泌尿紀要 8 卷12号〕
昭和 37 年12月

慈恵医大附属第三病院泌尿器科の1957年より 1961年にいたる 5 年間の統計的観察

東京慈恵会医科大学泌尿器科教室（主任 南 武教授）

坂 詰 正 巳
増 田 富 士 男
石 橋 晃

CLINICAL STATISTICS OF THE PAST FIVE YEARS (1957-1961) IN THE UROLOGICAL SECTION OF THE THIRD BRANCH HOSPITAL, TOKYO JIKEI UNIVERSITY SCHOOL OF MEDICINE

Masami SAKAZUME, Fujio MASUDA and Akira ISHIBASHI

From the Department of Urology, Tokyo Jikei University School of Medicine

(Director : Prof. Takeshi Minami, M. D.)

Presentations of number of patients, diseases, operations and urological examinations during the past 5 years, from 1957 to 1961, in the urological section of the Third Branch Hospital of Tokyo Jikei University School of Medicine were made in memory of the Tenth-Year Anniversary of Professor Takeshi Minami's Inauguration.

During the above mentioned period, the total numbers of outpatients, inpatients and operations were 1,855, 285 and 273 respectively.

Roentgenographic studies were done 1,935 times in the past 5 years and endoscopic examinations, 1,074 times in the same period. In general, there was tendency of increase in the scope of diseases and number of operations, year by year, among which increase of the prostatic hypertrophy was most remarkable.

On the contrary, venereal diseases were remarkably decreased. However, urogenital tuberculosis was not diminished in our hospital.

I 緒 言

東京都北多摩郡狛江町に、ベッド数 324 の慈恵医大第三分院が作られたのは、1950年10月であり、泌尿器科が設置される様になったのは1957年6月からである。以来、南武教授の御指導の下に、すでに5年を経過したがその間勤務する医師が常に1人乃至2人という小人数の為に、患者数手術数等も少なく、検査事項も余り多くはないが、5年間の年度推移を中心とした統計的観察を行い、郊外病院の状況を報告したいと思う。

II 外 来 患 者

1957年6月より、1961年12月迄の満4年半の間に当院泌尿器科外来を訪れた新患総数は、1,855人で、男子は1,196人女子が659人、男女の比は1.81:1である。東京大学及び京都大学泌尿器科の各10年間の統計報告を見ると、男女の比は東大が3.10:1、京大が2.59:1で、当科は比較的女子患者が多いと云える。併も女子患者は、年々増加を示し'61年には、男女比は、1.44:1に達している。これは当院がいわゆるベッドタウンに在る為、昼間の男性人口が少い事と、従来婦人科で治療を受けていた膀胱炎患者が、ようやく泌尿器科に来る様になった為と思われる。

表1 外来患者年度別総数

	total	♂	♀	♂ ♀
*1957	161	110	51	2.16 : 1
1958	342	234	108	2.17 : 1
1959	392	257	135	1.90 : 1
1960	452	295	157	1.88 : 1
1961	508	300	208	1.44 : 1
total	1,855	1,196	659	1.81 : 1

* 但し6月以降

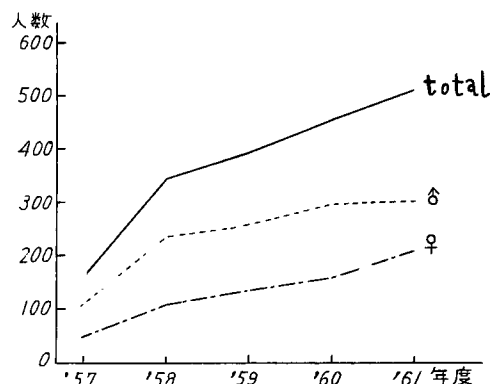


図1 外来患者の年度推移

表2 外来患者主要疾患の推移

	結核	結石	腫瘍	炎症	外傷	畸形及び 發育異常	その他	外来患者 総数
1957*	6(3.7%)	19(11.8%)	18(11.2%)	66(41.0%)	3(1.8%)	15(9.3%)	34(21.1%)	161(100.0%)
1958	17(5.0%)	39(11.4%)	27(7.9%)	138(40.4%)	4(1.2%)	34(9.9%)	83(24.3%)	342(100.0%)
1959	31(7.9%)	54(13.8%)	31(7.9%)	147(37.5%)	12(3.1%)	31(7.9%)	86(21.9%)	392(100.0%)
1960	37(8.2%)	69(15.3%)	36(8.0%)	157(34.7%)	9(2.0%)	43(9.5%)	101(22.3%)	452(100.0%)
1961	47(9.3%)	68(13.4%)	38(7.5%)	183(36.0%)	11(2.2%)	51(10.0%)	110(21.7%)	508(100.0%)
total	138(7.4%)	249(13.4%)	150(8.1%)	691(37.3%)	39(2.1%)	174(9.4%)	414(22.3%)	1,855 (100.0%)

* 但し6月以降

1. 年度別推移

各年度に於ける新患者数は、表1の如く1957年の161人より年々増え、1961年には508人に達した。このうち、特に女子患者の逐年増加が目立つのは、前述の理由による。図1は、この年度推移をグラフにしたもの

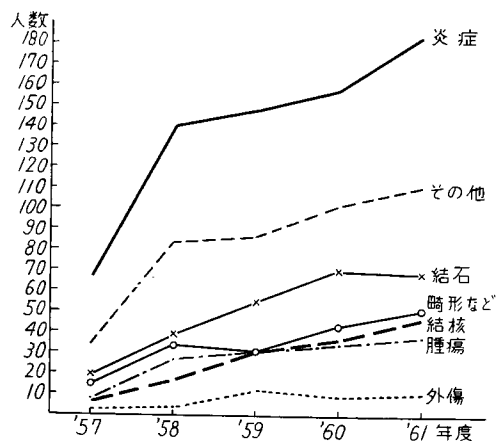


図2 外来主要疾患年度別実数

ので1957年を除き、平均14%の増加率である。

2. 主要疾患の推移

外来疾患を便宜上、結核、結石、腫瘍、(非特異性)炎症、外傷、畸形並びに發育異常、その他の7疾患群に分けてみたのが表2である。

又、各群の年度別実数をグラフにしたものが図2であり、その年の外来患者総数に対する各疾患群の百分

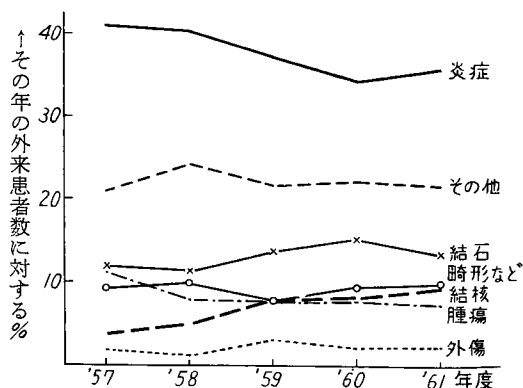


図3 外来主要疾患年度別百分率

率の年度推移をグラフにしたものが図3である。

この7群のうち、5年間を通じ最も多く見られたのは炎症の691人(37.3%),次がその他の疾患で414人(22.3%),結石症は249人(13.4%)で3番目であり、4番目は畸形及び發育異常の174人(9.4%)であつた。腫瘍は150人(8.1%)で5番目、結核は138人(7.4%)で6番目、最後が外傷の39人(2.1%)の順であつた。これら7群のうち、泌尿器結核は一般に、年々減少しつつあるといわれているにも拘わらず当科に於いては、年々実数百分率共に増加の傾向を示し、'57年では6人、その年の外来患者の3.7%であつたものが、'61年には47人(9.3%)に殖えている。此等の患者の多くは、他医から紹介されてきたもの達で、なかにはかなり遠方からも紹介されて来ている事を考えると、当地で結核が殖えているというより偶々患者が集つて来ていると解すべきものであらう。一般の統計によると、近年頃に結石の増加が著明であるというのが、当科では軽度の増加傾向が見られるに過ぎず、'61年では却つて実数百分率とも低下するのが見られた。腫瘍性疾患は、実数では年々増加しているが百分率には余り変動がなく外来患者の7~8%を占めている。外来患者の約1/3を占める炎症性疾患も、実数は年々増加しているが外来患者に対する百分率では逆に年々低下の傾向を辿っている。しかし'61年は、百分率も稍々上昇を示した。外傷は年々増加もとの予測がはずれ、'59年の12人(3.1%)を頂点にして都心と異り近年寧ろ減少している。畸形及び發育異常群には、年度変化はなく大体外来患者の10%前後である。その他の疾患も同様に変動は殆ど見られず20%前後を占めている。

3. 泌尿器結核

5年間の結核患者総数138人の年度別、部位別は表3に示す如くで5年間を通じ腎膀胱結核の51人が最も多く、結核性疾患の37%を占めている。更に副睾丸結核を合併せる腎膀胱結核の5人を加えると56人、40.6%になる。又、腎膀胱結核のみの年度推移を見ると、'59年が16人でその年の全結核患者の51.6%で、これ

表3 結核疾患々の推移(外来)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎膀胱結核	1	7	16	12	15	51(37.0%)
膀胱結核			1			1(0.7%)
前立腺結核			1		2	3(2.2%)
副睾丸結核	3	2	4	6	8	23(16.7%)
精索結核			2			2(1.4%)
腎膀胱結核兼副睾丸結核	1		1	1	2	5(3.6%)
副睾丸結核兼前立腺結核		1			2	3(2.2%)
副睾丸・前立腺・精のう腺結核					1	1(0.7%)
尿路結核の疑	1	7	6	15	14	43(31.2%)
性器結核の疑				3	3	6(4.3%)
total	6	17	31	37	47	138(100.0%)

* 但し6月以降

が最高で、'60年には12人、32.4%、'61年では15人、31.9%と減少の傾向が見られた。

副睾丸結核は、5年間に23人来院し全結核の16.7%を占めている。本症は、'57年を除き年々実数百分率共に増加を示している。即ち、'58年が2人で、その年の全結核の11.8%、'59年が4人12.8%、'60年が6人16.2%、'61年は8人17.0%と殖えている。又、外来患者総数に対する百分率をみても、年々殖えている。即ち、'58年が0.6%、'59年が1.0%、'60年が1.3%、'61年が1.6%の如くである。

尿路結核の疑、性器結核の疑は、いずれも、臨床的には結核であるが、確定診断の下されないうちに来院しなくなつた者達である。この両者を除外して、結核を尿路結核、性器結核に大別して見ると、(尿路と性器の2つに結核の在るものは、夫々1名とした)表4

表4 尿路結核及び性器結核の年度推移

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
尿 路 結 核	2(33.3%)	7(70.0%)	18(69.2%)	13(65.0%)	17(53.1%)	57(60.6%)
性 器 結 核	4(66.7%)	3(30.0%)	8(30.8%)	7(35.0%)	15(46.9%)	37(39.4%)
total	6(100.0%)	10(100.0%)	26(100.0%)	20(100.0%)	32(100.0%)	94(100.0%)

* 但し6月以降

の如くである。'57年を除き'58年では、全結核の70%を占めていた尿路結核が、年々その比率を減じ'61年には53.1%に低下している。一方、'58年では、全結核の30%に過ぎなかった性器結核は、年々増え、'61年には、46.9%に迄上昇している。この傾向が今後も続くかどうかは、興味を有するものと思う。

4. 結石症

表5に示す如く、5年間の結石患者総数は249人で、その大多数は上部尿路結石である。就中、尿管結石が最も多く、99人、39.8%を占め、下部尿路結石は、僅かに2.8%を占めるに過ぎない。又、尿路結石の疑とは、自然排石後と思われる者、結石の症状を有し乍らレ線撮影に來なかつた者達である。

表5 結石疾患患者の推移(外来)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎結石	1	6	8	4	4	23(9.2%)
尿管結石	8	21	21	25	24	99(39.8%)
膀胱結石			1	1	3	5(2.0%)
尿道結石					1	1(0.4%)
前立腺結石					2	2(0.8%)
腎結石兼尿管結石		2	4		1	7(2.8%)
尿管結石兼前立腺結石			1			1(0.4%)
膀胱結石兼尿道結石		1				1(0.4%)
尿路結石の疑	10	9	19	39	33	110(44.2%)
total	19	39	54	69	68	249(100.0%)

* 但し6月以降

5. 腫瘍疾患

腫瘍疾患患者の年度推移は表6に示す如くで5年間の総数は150人である。最も多く見られたのが前立腺肥大症の63人で5年間の腫瘍疾患の42.0%を占めている。次が膀胱腫瘍の23人15.3%、並びに尿道カルンクラの20人13.3%の順であつた。

前立腺肥大症は、年々僅かではあるが患者数は増加しているが、百分率ではあまり変動を見ない。これは膀胱腫瘍の場合も同じである。

6. 炎症性疾患

表7に示す如く、5年間の炎症性疾患患者は、総計691人であつた。このうち最も多いのが急性膀胱炎で5年間に287人來院し、41.5%と炎症疾患の約半数を占めている。これを年度別に見ると、'57年より'59年

表6 腫瘍疾患患者の推移(外来)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
後腹膜腫瘍		1	1			2
腎腫瘍			1			1
腎腫瘍の疑	1	1		2	1	5
腎被膜腫瘍				1		1
腎嚢腫					1	1
多発性嚢胞腎	1					1
膀胱腫瘍		2	9	5	9	23(15.3%)
膀胱腫瘍の疑				1		1
尿道腫瘍	2		2		1	5
尿道カルンクラ	3	4	2	6	5	20(13.3%)
尿管腫瘍				1		1
睪丸腫瘍		2	1		1	4
睪丸腫瘍の疑				1		1
前立腺癌	1		1	1	1	4
前立腺癌の疑			1	1	1	3
前立腺肥大症	8	12	12	15	16	63(42.0%)
前立腺肥大症の疑		1	1			2
陰莖癌	1					1
尖圭コンヂローム		4	2	1	2	9
陰莖アテローム				1		1
陰嚢内多発性嚢腫	1					1
total	18	27	31	36	38	150(100.0%)

* 但し6月以降

迄は、25人(37.9%)、49人(35.5%)、47人(32.0%)と炎症の中で占める比率が低下していつたのであるが、'60年には75人(47.8%)、'61年は91人(49.7%)と再び増加し始めている。これを、外来患者に対する比率にしてみても同様で、'57年より'59年迄は、15.5%、14.3%、12.0%と減少傾向を辿っているが、'60年になると16.6%と増え、'61年には、外来患者の17.9%に達している。これが前述せる女子患者増加の一因である。

2番目は、單純性(非特異性)尿道炎の112人で16.2%であつた。淋疾は5年間総計32人で第6位であり、炎症性疾患の4.6%を占めている。

又、年々炎症の中で占める比率は低下し、'61年に

表7 炎症疾患々者推移(外来)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎盂腎炎		3		1	4	8
腎盂膀胱炎	1	1	11	1		14
腎周囲炎及び腫瘍			1			1
急性膀胱炎	25	49	47	75	91	287(41.5%)
慢性膀胱炎	2	6	14	6	12	40
滲出性膀胱炎	2	1	1			4
小児出血性膀胱炎	2	2	5	11	10	30
膀胱三角部炎		2	2		5	9
膀胱周囲炎及び膿瘍			2	2		4
膀胱白板		3				3
後部尿道炎		1		3	4	8
急性尿道炎	2	7	9	8	6	32
単純性尿道炎	18	28	13	22	31	112(16.2%)
尿道周囲炎		1				1
外尿道口炎					1	1
急性睾丸炎		1	1	1		3
急性副睾丸炎	2	9	9	14	3	27
急性前立腺炎		2	2	2	2	8
慢性前立腺炎	3	9	17	4	3	36
慢性前立腺炎の疑			1			1
前立腺膿瘍		2	1			3
精のう腺炎			1			1
亀頭包皮炎症	8	10	10	13	11	52
慢性陰茎海绵体炎				1		1
会陰部膿瘍				1		1
軟性下疳		1		1		2
軟性下疳の疑				1		1
そけい淋巴肉芽腫	1					1
total	66	138	147	157	193	691

* 但し6月以降

は、3.3%に低下している。尚、5年間の外来患者総数1,855人に対する全淋疾患者の百分率は1.7%であり、外来で偶に見る疾患になつてきている。

7. 外傷性疾患

5年間の外傷患者総数は39人で、その年度推移は表

表8 外傷疾患々者の推移(外来)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎外傷			1	1	1	3
膀胱外傷	1			1	2	4
尿道外傷			4		1	5
睾丸外傷		1		1		2
陰囊打撲		1	2	1		4
陰茎折傷					1	1
外陰部裂傷		1				1
尿管損傷			1			1
尿管腫瘍				1	1	2
外傷性尿道瘻				1		1
外傷性尿道狭窄	2	1	3	4	5	15
total	3	4	12	9	11	39

* 但し6月以降

8に示す如くである。最も多く見られたのは外傷に起因する尿道狭窄で、5年間に15人来院し、38.5%に達した。

これは、外傷の中では尿道外傷が最も多いと思われる。

8. 畸形及び發育異常

このグループの5年間総数は、174人である(表9)。

表9 畸形及び發育異常疾患々者の推移(外来)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
骨盤腎	1					1
發育不全腎					1	1
遊走腎	2	8	10	16	17	53(30.5%)
先天性水腎症					1	1
畸形腎盂					2	2
重複腎盂尿管	1		2	1		4
尿管開口異常					1	1
膀胱憩室		1	1	1		3
膀胱三角部異常		1				1
膀胱頭部肥厚					5	5
膀胱下垂			2			2
尿道憩室			1		1	2

尿道下裂	2		1	2		5
包茎	4	14	6	8	13	45(25.9%)
嵌頓包茎		2		2		4
癒着包皮	1					1
前立腺症				4	5	9
停留睪丸		1		1	1	3
睪丸發育不全					1	1
睪丸捻転		1				1
精系静脈瘤	3	5	6	4	2	20(11.5%)
性器發育不全		1		1		2
類宦官症					1	1
不妊症				2		2
無(乏)精子症	1		2	1		4
total	15	34	31	43	51	174(100.0%)

* 但し6月以降

最も多いのは年々殖えている遊走腎で5年間に53人来院し、この群の30.5%を占めている。比較的本症が多いのは、前述の如く、当科は女子患者が多いと思われる。尚、この53人中、女子は43人である。2番目は包茎の45人、25.9%で3番目が精系静脈瘤の20人、11.5%であった。

9. その他の疾患

病名不明の者、泌尿器科疾患以外の者も含めたこの群の5年間総数は、414人であった(表10)。

表10 その他の疾患々々の推移(外来)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
急性腎炎		1		1	1	3
腎炎の疑		1		1		2
特発性腎出血		2		2	6	10
特発性腎出血の疑			1	1	1	3
腎水瘤			1			1
尿管皮膚瘻		1				1
膀胱神経症	5	11	5	10	18	49
膀胱異物		1	2	2	1	6
膀胱脱					1	1
膀胱子宮瘻		1				1
神経因性膀胱	1	5	3	1	4	14
子宮癌の膀胱浸潤				1		1
膀胱出血		1				1
尿道脱		1	1			2

尿道狭窄	1	1	5	4	4	15
睪丸神経症		1	1		2	4
陰嚢水瘤		4	6	7	7	24
精液瘤		1				1
精系水腫		1			1	2
精管結紮希望	4	5	6	6	5	26
バルトリン氏腺膿瘍					1	1
血精液症				1		1
乳糜尿症			3	1	1	5
塩類尿				4	3	7
起立性蛋白尿		1				1
無症候性血尿		1				1
無尿				1		1
尿閉		1			1	2
尿失禁		1	2	3		6
夜尿症	4	11	20	8	14	57
性的神経症		1	1	1	2	5
陰萎・早漏・不妊	1	1	5	4	2	13
梅毒	1	2	1	1	2	7
高血圧		1				1
ライター氏症候群の疑				1		1
尿崩症の疑				1		1
原発性アルドステロニズムの疑					1	1
陰部皮膚疾患	6	5	7	7	7	32
婦人科的疾患	1	2				3
外科的疾患		1		3	1	5
不明		1		1	1	3
健	10	16	16	28	23	93
total	34	83	86	101	110	414

* 但し6月以降

このうち、夜尿症が5年間に57人来院し、この群の13.8%を占めて最も多く、次が近年増加してきた膀胱神経症の49人、11.8%である。

Ⅲ 入院患者

1957年6月より、1961年12月迄の入院患者総数は285人である。そのうち男子が197人、女子が88人でその比は2.24:1であった(表11)

5年間を平均してみると外来患者の約15%が入院していることになるが、病床数が限られている為外来患者の増加と平行して入院患者が増えるという訳にはいかず、又患者も意識的に選択されるのは止むを得ない事である。図4は、入院患者の年度別推移をグラフにしたものである。

表11 入院患者年度別総数

	total	♂	♀	♂ : ♀	入院患者総数対 外来患者総数比
1957*	16	12	4	3.00 : 1	9.94%
1958	61	42	19	2.21 : 1	17.8 %
1959	72	49	23	2.13 : 1	18.4 %
1960	61	43	18	2.39 : 1	13.5 %
1961	75	51	24	2.13 : 1	14.8 %
total	285	197	88	2.24 : 1	15.4 %

* 但し 6月以降

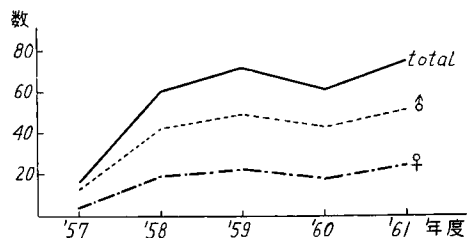


図4 入院患者の年度推移

1. 主要疾患の推移

外来患者の場合と同様に、7つの疾患群に分けてその年度推移を見ると、5年間を通して最も多く入院しているのは結石症の77人（27.0%）で、次が腫瘍の63

表12 入院患者主要疾患の推移

	結核	結石	腫瘍	炎症	外傷	畸形及び 發育異常	その他	入院患者総数
1957*	1(6.3%)	6(37.5%)	4(25.0%)	1(6.3%)	1(6.3%)	3(18.8%)	0	16(100.0%)
1958	5(8.2%)	23(37.7%)	14(23.0%)	5(8.2%)	1(1.6%)	5(8.2%)	8(13.1%)	61(100.0%)
1959	17(23.6%)	16(22.2%)	18(25.0%)	6(8.3%)	6(8.3%)	6(8.3%)	3(4.2%)	72(100.0%)
1960	13(21.3%)	17(27.9%)	14(23.0%)	3(4.9%)	4(6.5%)	5(8.2%)	5(8.2%)	61(100.0%)
1961	10(13.3%)	15(20.0%)	13(17.3%)	6(8.0%)	7(9.4%)	12(16.0%)	12(16.0%)	75(100.0%)
total	46(16.1%)	77(27.0%)	63(22.1%)	21(7.4%)	19(6.7%)	31(10.9%)	28(9.8%)	285(100.0%)

* 但し 6月以降

人（22.1%），3番目が結核の46人（16.1%）で以下，畸形及び發育異常の31人（10.9%），その他疾患28人（9.8%），炎症21人（7.4%）並びに外傷19人（6.7%）の順であつた（表12）

図5，図6は，これら主要疾患の年度別実数及び百分率を図示したものである。

5年間に46人入院した結核性疾患々者は，'59年の17人を最高に，'60年は13人，'61年は10人と近年は減少傾向を辿っている。外来では，結核性疾患が殖えて

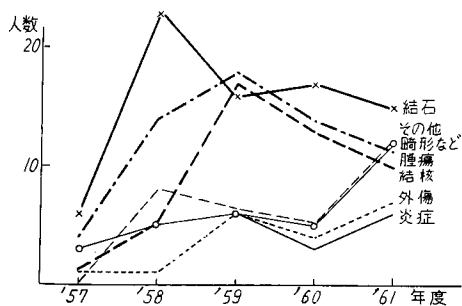


図5 入院主要疾患年度別実数

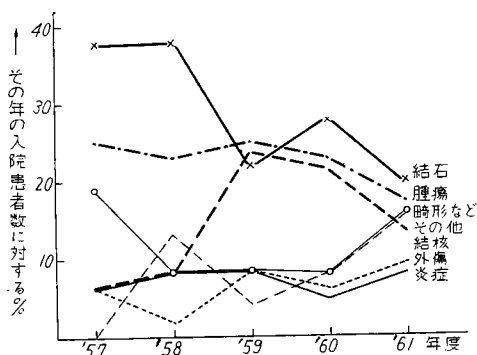


図6 入院主要疾患年度別百分率

いるにも拘らず，この様な傾向が見られるというのは，入院処置を必要とする様な結核は矢張り減つて来ている事を示すものと思われる。

結石症も外来では増加しているのに対し，入院患者は，'58年の23人が最高で，以後減少傾向を示し，'61年には15人に迄減っている。これは近年，保存的療法を多く用いる為である。

腫瘍疾患も同様に，外来では年々殖えているのに対

し、入院患者は'59年の18人が最も多く'60年14人、'61年13人と減少を示している。

炎症性疾患には、年度変化が見られないが、外傷は幾分増加する傾向を示している。畸形及び發育異常のグループは、'61年に稍々多く入院した。その他の疾患が'61年に殖えたのは、整形外科と兼科で脊髄膀胱の患者を管理する事になったからである。

2. 泌尿器結核

表13に示す様に、腎結核が最も多く、5年間の結核患者46人中、33人、71.7%を占めている。

表13 結核疾患々者の推移(入院)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎 結 核	1	4	13	7	8	33
膀胱 結 核			1			1
副 辜 丸 結 核			1	4	1	6
副辜丸、精囊腺 前立腺結核					1	1
精 索 結 核			2			2
尿路結核の疑		1		2		3
total	1	5	17	13	10	46

* 但し6月以降

3. 結 石 症

入院した者はすべて上部尿路結石で、尿管結石が5年間に53人、68.9%と最も多く、腎にも結石を合併する4人を加えると57人、74.0%に達した。

表14 結石疾患々者の推移(入院)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎 結 石		4	3	6	2	15
尿 管 結 石	6	16	11	8	12	53
腎結石+尿管結石		3	1			4
尿 路 結 石 の 疑			1	3	1	5
total	6	23	16	17	15	77

* 但し6月以降

4. 腫瘍疾患

外来と同様に、最も多いのが前立腺肥大症で、5年間の腫瘍患者総数63人のうち30人、47.6%と約半数を占めている。

次が膀胱腫瘍の18人で28.6%であつた(表15)

表15 腫瘍疾患々者の推移(入院)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎 腫 瘍			1		1	2
膀胱腫瘍		2	7	4	5	18
尿道腫瘍			1	2		3
辜丸腫瘍		2	1			3
前立腺癌		1			1	2
前立腺肥大症	3	9	5	7	6	30
陰 囊 腫 瘍	1					1
後腹膜腫瘍			1			1
膀胱腫瘍の疑				1		1
前立腺癌の疑			1			1
副腎腫瘍の疑			1			1
total	4	14	18	14	13	63

* 但し6月以降

5. 炎症性疾患

各疾患については、例数が少ないので、その年度変化は不明である。又、従来腎盂炎と診断されているものは、すべて腎盂腎炎の中に一括した(表16)

表16 炎症疾患々者の推移(入院)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎 盂 腎 炎					4	4
腎 盂 膀 胱 炎	1	1				2
腎 周 囲 炎					1	1
腎周囲膿瘍			1			1
膀胱炎			1		1	2
膀胱周囲炎			2			2
膀胱周囲膿瘍				2		2
急性前立腺炎		1	1			2
前立腺膿瘍		2				2
急性副辜丸炎		1	1			2
陰 の う 膿 瘍				1		1
total	1	5	6	3	6	21

* 但し6月以降

6. 外傷性疾患

郊外に在る故か、救急指定病院であるにも拘わらず、外傷性疾患は意外に少なく、5年間に19人である。そのうち、外傷性尿道狭窄が5人であつた(表17)

表17 外傷疾患々者の推移(入院)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎 外 傷				2		2
膀胱 外 傷	1			1	1	3
尿道 外 傷			1		2	3
陰 囊 打 撲			1			1
尿管 損 傷					1	1
尿管 腔 癭				1		1
膀胱 癭					1	1
尿道 癭			2			2
外傷性尿道狭窄		1	2		2	5
total	1	1	6	4	7	19

* 但し6月以降

表18 畸形及び發育異常疾患々者の推移(入院)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
骨 盤 腎	1					1
發育不全腎					1	1
遊 走 腎	1	4	2	2	3	12
先天性水腎症					1	1
畸 形 腎 盂					1	1
重 複 腎 盂			1			1
膀胱頸部肥厚					2	2
尿道下裂	1		1			2
前立腺症				3		3
包 茎					1	1
停留睪丸					1	1
睪丸捻転症		1				1
精系静脈瘤			2		2	4
total	3	5	6	5	12	31

* 但し6月以降

7. 畸形及び發育異常

この群の5年間総数は、31人で、最も多く入院したのは遊走腎の12人(34.3%)であつた。外来を訪れた遊走腎患者は53人であるから、その22.6%が入院した訳である(表18)

8. その他の疾患

その他の疾患々者総数は、28人である。3人も乳糜尿患者が見られたが、彼等はいずれも沖縄出身者であつた(表19)

表19 その他の疾患々者の推移(入院)

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
特発性腎出血		1			2	3
水 腎 症			1			1
膀胱 出 血		1				1
膀胱 脱					1	1
膀胱異物		1		1		2
膀胱白板		2	1			3
膀胱神経症		1				1
神経因性膀胱					4	4
陰のう水腫				2	2	4
夜 尿 症		1				1
乳 糜 尿			1		2	3
無 尿				1		1
腎性高血圧の疑		1				1
脊 索 腫					1	1
急性虫垂炎				1		1
total	0	8	3	5	12	28

* 但し6月以降

IV 手術患者

1957年6月より、1961年12月迄の手術患者総数は、264人で、そのうち男子が200人、女子が64人であつた。

外来患者に対する手術患者の比率は、表20に示す様に平均14.2%である。手術患者の年度推移は、表20、図7に示す如く年々僅かづつではあるが増加を示している。併し、これも後述する様に主として外来小手術が殖えているのであつて、病床数の関係及び医師数の関係から大手術は、ほとんど増加していない。

表21、図8に示す如く入院手術患者のみについて見ると、5年間に男子117人女子34人あわせて151人が入

表20 手術患者年度別総数(含外来小手術)

	total	♂	♀	♂ : ♀	外来患者に対する手術率
1957*	16	11	5	2.20 : 1	9.9%
1958	47	37	10	3.70 : 1	13.7%
1959	61	46	15	3.06 : 1	15.6%
1960	64	45	19	2.37 : 1	14.2%
1961	76	61	15	4.07 : 1	15.0%
total	264	200	64	3.13 : 1	14.2%

* 但し6月以降

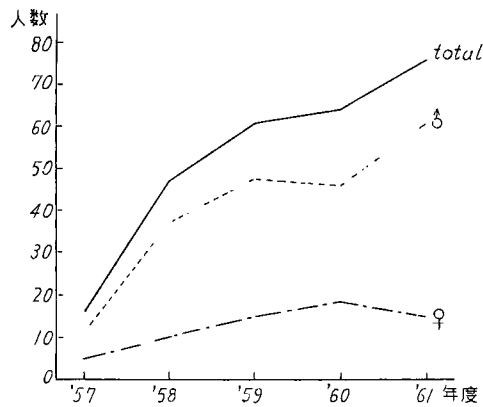


図7 手術患者の年度推移

表21 入院手術患者年度別総数

	total	♂	♀	♂ : ♀	入院患者に対する手術率
1957*	8	5	3	1.67 : 1	50.0%
1958	22	17	5	3.40 : 1	36.1%
1959	38	31	7	4.43 : 1	52.8%
1960	41	30	11	2.73 : 1	67.2%
1961	42	34	8	4.25 : 1	56.0%
total	151	117	34	3.44 : 1	53.2%

* 但し6月以降

院手術を受けている。平均すると入院患者の53.2%が手術を受けた事になる。又、その年度推移を見ると、前述せる如く入院手術患者数の変動は殆んどなく、凡そ1年40人前後である。

1. 手術々式の推移

1957年6月より、1961年12月迄に264人の患者に、

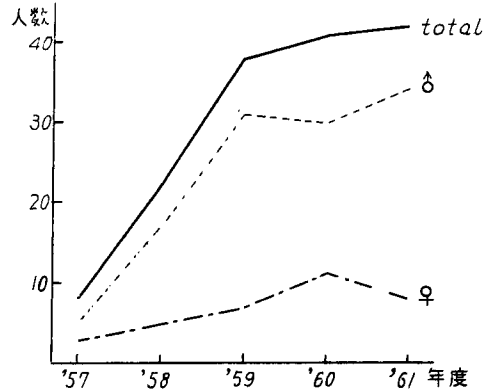


図8 入院手術患者の年度推移

表22 手術々式の推移

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
上部尿路に対する手術回数	6	14	16	23	21	80(29.3%)
下部尿路に対する手術回数	2	8	18	20	18	66(24.2%)
性器に対する手術回数	7	24	26	20	36	113(41.4%)
その他の手術	0	1	4	2	7	14(5.1%)
total	15	47	64	65	82	273(100.0%)

* 但し6月以降

表23 手術々式の推移 (1)上部尿路に対する手術

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
腎 剔 除 術	2	2	4	4	7	19
腎 部 分 切 除 術		2				2
腎 固 定 術	1	2	2	3	2	10
腎 被 膜 剥 離 術		1			1	2
腎周囲リンパ腺廓清術					1	1
腎 瘻 設 置 術					1	1
腎周囲膿瘍切開術			1			1
腎 切 石 術		1		1		2
腎 盂 切 石 術		1	4		2	7
尿 管 切 石 術	3	5	4	11	4	27
尿管端々吻合術				1		1
尿管廻腸皮膚瘻設置術				1		1
尿管皮膚移植術			1		1	2
尿管膀胱再移植術				2	2	4

total	6	14	16	23	21	80
-------	---	----	----	----	----	----

* 但し6月以降

総計 273 回の手術を行っているが、その術式を表 22 の如く分けて見ると、上部尿路に対する手術は 80 回 (29.3%)、下部尿路に対する手術が 66 回 (24.2%)、性器に対する手術が 113 回 (41.4%)、その他の手術が 14 回 (5.1%) である。

2. 上部尿路に対する手術

5 年間の上部尿路に対する手術 80 回のうち、最も多く行われたのが尿管切石術の 27 回 (33.8%) である。この切石術が '61 年に減少したのは、前述の如く、バスケットカテーテルの使用及び自然排石促進法が多く試みられた為である。2 番目に多かったのは、腎切除術の 19 回 (23.8%)、次が腎固定術の 10 回 (12.5%) であつた (表 23)

3. 下部尿路に対する手術

5 年間の下部尿路に対する手術 66 回のうちその 1/3 にあたる 22 回が手術用膀胱鏡を用いた経尿道的操作である。この他、cap-patch の手術を 3 例に行っている (表 24)

表 24 手術々式の推移 (2)下部尿路に対する手術

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
膀胱全切除術				1		1
膀胱部分切除術		1		1		2
回腸膀胱造設術			2	1		3
膀胱腫瘍剔除術			1	2		3
膀胱破裂閉鎖術				1	1	2
膀胱周囲膿瘍切開術		1				1
膀胱切石術					1	1
膀胱異物摘出術				1		1
膀胱瘻設置術					1	1
膀胱瘻閉鎖術					1	1
膀胱脱切除術					1	1
経尿道的操作	3	4	9	6		22
(膀胱腫瘍焼灼術)			(1)		(2)	(3)
(膀胱白板・汙胞焼灼術)	(2)	(1)	(5)	(1)		(9)
(膀胱結石及び異物摘除)	(1)	(2)	(2)	(2)		(7)
(膀胱頸部切開術)				(1)		(1)
(尿管口切開術)				(1)	(1)	(2)

尿道断裂成形術			2		1	3
尿道下裂成形術			1			1
尿道瘻閉鎖術			3			3
尿道狭窄切除術					2	2
尿道結石摘除術					1	1
尿道カルンクラ焼灼術	2	2	3	4	2	13
尿道腫瘍剔出術					1	1
尿道脱切除術			1			1
外尿道口切開術		1				1
外尿道口裂傷縫合術		1				1
total	2	8	18	20	18	66

* 但し6月以降

4. 性器に対する手術

5 年間の性器に対する手術総数は 113 回で、最も多いのが包茎手術の 37 回 (32.7%) であつた。又、被膜下前立腺剔除術は、年々僅か乍ら増加し 5 年間に 14 回 (12.4%) 行い、第 3 位を占めている (表 25)

表 25 手術々式の推移 (3)性器に対する手術

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
一側除辜術	1	3	2	1	2	9
辜丸固定術		1				1
辜丸試験切除術			1			1
副辜丸剔除術			1	2	1	4
被膜下前立腺剔除術		3	2	4	5	14
前立腺試験切除術			1			1
精管結紮術	3	5	6	7	12	33
精索結核腫剔除術			1			1
精系静脈瘤根治手術			1		1	2
癒着精索剥離術					1	1
陰のう水腫根治手術			2		3	5
陰のう血腫切開術			2			2
陰のう・のう腫剔出術	1					1
包茎手術	2	12	6	6	11	37
炎性コンジローム焼灼術			1			1
total	7	24	26	20	36	113

* 但し6月以降

5. その他の手術

その他の手術は、5年間総計14回で、副腎剔除術を1回行っている他、人工腎臓(慈大式)も1例に施行している(表26)

表26 手術々式の推移 (4)その他の手術

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
副 腎 剔 出 術			1			1
尿管腫瘍剔除術			1			1
膀胱後腔腫瘍剔除術			1			1
試 験 開 腹 術			1		2	3
胆 の う 剔 出 術		1				1
そけいヘルニヤ根治手術				1		1
両側内腸骨動脈結紮術					2	2
手術創再閉鎖術					2	2
腕部ガングリオン剔除術					1	1
人 工 腎 臓				1		1
total	0	1	4	2	7	14

* 但し6月以降

尚、この表には加えていないが、著者等は、右側腹部を切開する場合は、必ず虫垂切除を併せ行う事を原則にしている。

V X 線 検 査

X線検査法は、内視鏡検査法を並んで泌尿器科領域では最も普通に行われる検査法である関係上、撮影回数は当然患者数に平行して増加していくものである(表27)

表27 X線検査法の推移

	撮影回数	外来患者数	患者1人についての撮影回数
1957*	63	161	0.39
1958	321	342	0.94
1959	529	392	1.35
1960	484	452	1.07
1961	538	508	1.06
total	1,935	1,855	1.04

* 但し6月以降

5年間に行つた撮影回数は、総計1,935回であり、この間に外来を訪れた患者数は1,855人であるので、平均、外来患者1人について1.04回の撮影を行つたわけである。併し乍ら、'59年の1人あたり1.35回を頂点にして、以降1人あたりの撮影回数が減少してきたのは、放射線科の撮影能力が限界近く迄来た事と、矢張り医師数の不足によるものと思われる。

次に撮影法の種類であるが、表28に示す様に排泄性腎盂撮影法が最も多く、5年間に819回行なつている。

表28 X線検査法の種類

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
単純撮影法	4	96	192	178	190	660(34.1%)
排泄性腎盂撮影法	31	141	217	206	224	819(42.3%)
逆行性腎盂撮影法	13	51	62	55	68	249(12.9%)
経腰的腎盂撮影法			1	2	5	8(0.4%)
膀胱撮影法 (含気体膀胱撮影法)	3	10	23	19	17	72(3.7%)
尿道撮影法	10	18	31	19	28	106(5.5%)
精のう撮影法			1	1	2	4(0.2%)
後腹膜気体送 入法	1	2	2	3	2	10(0.5%)
腹部大動脈撮影法	1	3		1	2	7(0.4%)
total	63	321	529	484	538	1,935 (100.0%)

* 但し6月以降

これは、外来患者2.3人に1回行なつている割合になる。次が単純撮影の660回、逆行性腎盂撮影の249回の順であつた。

VI 内視鏡検査

表29 内視鏡検査法の推移

	検査回数	外来患者数	内視鏡1回に対する患者数
1957*	50	161	3.22
1958	217	342	1.58
1959	308	392	1.27
1960	258	452	1.75
1961	241	508	2.11
total	1,074	1,855	1.73

* 但し6月以降

表30 内視鏡検査法の種類

	1957*	1958	1959	1960	1961	total
尿道鏡	4	8	8	1	3	24
膀胱鏡	46	209	300	257	238	1050
(尿管カテーテリスム)	(5)	(14)	(24)	(27)	(44)	(114)
(逆行性腎盂撮影)	(13)	(51)	(62)	(55)	(68)	(249)
total	50	217	308	258	241	1074

* 但し6月以降

表29に示す様に、5年間に行つた内視鏡検査回数は1,074回である。平均すると外来患者1.73人に1回の割合で、内視鏡を行なつた事になる。併し、本検査法も、'59年の308回を頂点にして以後寧ろ減少したのは、患者数の増加による皺寄せが、この手間と時間のかかる内視鏡検査に集められたものと思う。内視鏡検査を、尿道鏡と膀胱鏡に分けてその年度推移を見ると表30の如くである。この膀胱鏡の中に含まれる尿管カテーテリスムとは、薬液等の腎盂注入やバスケットカテーテルの使用、尿管の拡張或は探索等の操作を含むもので逆行性腎盂撮影は含まれていない。従つて、この撮影法を加えると尿管カテーテリスムは、5年間総

計363回になる。平均すると、外来患者5.11人に1回の割合で尿管カテーテリスムを行つたことになる。

VII 総括及び結語

南武教授の就任10周年にちなんで、第三病院泌尿器科が設置された1957年より1961年にいたる5年間の患者数、手術数、X線撮影及び内視鏡検査数を集計報告した。

1. 外来患者総数は1,855人で、そのうち男子が1,196人、女子が659人であつた。

2. 入院患者総数は285人で、男子が197人、女子が88人であつた。

3. 手術患者総数は264人で、そのうち入院手術患者は151人であつた。

4. X線検査は、総計1,935回行なつた。平均1人の患者に1.04回の撮影を行なつたわけである。

5. 内視鏡検査は、総計1,074回行なつた。平均すると患者1.73人に1回の割合で検査した事になる。

(御校閲戴いた南教授に感謝いたします)

UMB 3

造影能率の高い

血管造影剤 ウロコリンM



第一製薬
東京・日本橋

特徴

- すぐれたコントラスト・適度な粘稠度
- 副作用少なく、溶液は安定

包装

ウロコリン M-75 75% 20ml
ウロコリン M-60 60% 20ml

健保適用

薬価基準

60%	20ml	1A	466円
75%	20ml	1A	572円

一文献進呈—